

# みやもとだより

第6号 平成26年11月発行

季節のおまつり

## 秩父夜祭

秩父一帯で昔から歌われている秩父音頭に

「秩父ナアーエ、秩父銘仙アレサ、機どころ、  
秋蚕仕舞うて、麦蒔き終えて、秩父ナアーエ、  
秩父夜祭り、アレサ待つばかり」という一節  
がある。秩父は江戸時代より養蚕と玉糸で織  
つた銘仙と呼ばれる絹織物の製造が盛んで、  
今年も待ちに待った祭を迎える喜びと哀愁を  
合わせもつた民謡である。

秩父神社は

平安初期の創建で、祭礼は十二月二日が宵宮、三日が本祭である。正午頃には境内や町内では屋台崩しのよう

に屋台が左右に延べられ、舞台に設えられた上で、義太夫節に合わ

せて本格的な歌舞伎が演じられる。やがて午後七時頃になると境内には二基の笠鉾と四基の屋台が勢ぞろいし、ほんぼりと灯が入る。屋台のなかでは囃子が勢いよく始まり、お旅所へ順次向かってゆく。

午後八時頃には一番の見所であるお旅所手前の急斜面の団子坂に掛かる。豪華な装飾を施し、灯かりに揺れる笠鉾や屋台のかで満身の力を込めて打ち込まれる大太鼓の連打は、山あいの町を熱狂に包み、初冬の夜の夢は最高潮に達する。それに呼応するように打ち上げられる花火の競演も観衆の耳目につまでも残る。

秩父神社の祭神は八意思兼神と定められているが、中世以来、妙見菩薩を女性に見立てた女神がそれに習合する。この祭は、その女神さまと武甲山の男神さまが一年に一度お旅所で逢瀬を楽しむ神事もある。弊社でも秩父屋台囃子の大鼓の御用を仰せつかっているが、特に大太鼓の皮張りは怒涛のように腹に響いてくるような迫力を出さねばならず、職人の腕の見せどころである。厳しい冬に対峙する山峡の町ゆえに自然と生み出されたリズムであろう。



(写真・文 宮本卯之助)



## 福德神社本社神輿

十月二十六日大安、福德神社様に御本社神輿をお納めしました。二十三日遷座祭を執り行われたばかりの新しいお社。御神輿の形状は、そのお社の屋根と同じ八つ棟



## 宮本重義

神輿には作人札と呼ばれる製作者の名札が添えられています。弊社の作人名は「宮本重義」。神輿の製作を手がけるようになつた五代目卯之助の頃より「重義」と名乗るようになりました。実在する人物ではありませんが、この言葉には「義を重んずる正しいことを行う」という意味が込められており、会社の社是にもなっています。神

輿は二十職もの職人の手を経て完成します。みながこの気持ちを持つて製作に携わっています。



浅草徒然につき

## 歳の市 十一月十七日・十八日・十九日

年瀬迫る頃、浅草寺境内では歳の市が開催されます。もともとは縁起物や正月用品の出店が様々にみられたようですが、次第に羽子板を扱うお店が主流となり「羽子板市」と呼ばれるようになりました。羽子板は、正月の伝統的な遊びである羽根突きの道具ですが、江戸時代より貼り絵や押し絵を施すようになり、大変豪華な飾り物となつていったのです。

お納め当日は、多くのお客様にご覧いただき、「担ぐのが楽しみ。」と嬉しいお声かけもいただきました。

## 雪 音

シンシンと降る雪、サラサラと舞う粉雪。ときに物悲しさを感じる雪の風情。歌舞伎では、本来は音のない雪の音を太鼓で表現します。



音が創り出されます。太鼓から聞こえてくる深い音色は、薄暗い冬の空からズンズンと響いてくる雪音そのものです。

寒さ厳しくなる十二月、「仮名手

本忠臣蔵」や「佐倉義民伝」など、雪の降る場面を描いた演目の上演機

会が増えます。舞台を観ながら、今

年もまた冬がやつてきた、そんな気分になる季節です。

代表取締役社長

宮本芳彦

発行	株式会社宮本卯之助商店
企画広報室	〒111-1035 東京都台東区西浅草二丁一 電話(03)3138-4412-2411 <a href="http://www.miyanoto-unosuke.co.jp">www.miyanoto-unosuke.co.jp</a>

秩父夜祭の足音を聞くと今年の祭礼もいよいよ納めの気分。今年も実際に様々な祭礼に関わらせて頂きました。「みやもとだより」の発刊からもうすぐ一年。隔月発行で取材させて頂いた祭礼はまだ僅か六つです。この国に数多ある豊かな祭礼文化を紹介する道のりはまだ始まつたばかりですが、改めてその奥深さを感じた一年でした。祭礼は最も身近に日本の文化を体得できる場です。参加する事で、敬う、助け合うといった心だけでなく、彫金や彫刻、塗りや染めといった工芸の感性も敢えて学ばずとも体に染み込んでいく。そうして土地の文化が豊かに育まれていく。これが祭礼の果たして来た社会的役割ではないでしょうか。来年も「みやもとだより」をお楽しみに。